

デビュー戦「155km」の衝撃。



内角高め球にフランクリンが怒るも、松坂は動じず、睨み返した

2017年の HERE WE GLOW AGAIN 松坂世代。

鈴木忠平=文

text by Tadahira Suzuki

杉山ヒデキ=写真

photographs by Hideki Sugiyama

「あんな空振りしたことない」
18歳の新人が投じたストレートが
プロ屈指の強打者を粉砕した。
当事者が語る、怪物誕生の真実。

4月7日、本拠地・東京ドームのグラウンドに足を踏み入れた日本ハムの主砲・片岡篤史は、肌にもいっつもはなれない熱気を感じていた。屋内とはいえ春先はまだ寒いはずだが、この日はスタンドを埋めた人たちの熱がグラウンドまで伝わってきた。

片岡が初めて松坂大輔を見たのは前年夏の甲子園だった。

「春夏連覇は俺たち以来だったから」

片岡はその11年前、PL学園の主砲として春夏連覇を成し遂げた。それ以来の王者が誕生し、その中心に怪物と呼ばれる投手がいる。だから、シーズン中ながらテレビに視線を送ったのだった。ただ、対戦前の松坂への意識はあくまで1人の新人に対するものでしかなかった。

「変化球投手やろ。まだ高校生やんけ。試合前はそんな感じで考えていた」

開幕からの3試合で片岡は打率5割と、好調ビッグバン打線の王様として君臨していたのだから、それも当然だった。

初回、井出竜也と小笠原道大が打ち取られると、3番片岡はゆっくりと打席に入り、松坂と向かい合った。2球目。150kmがきた。明らかに前の2人とはギアを変えていた。新人らしからぬ度胸にグリップを握る手に力が入る。そして4球目。片岡は最初の衝撃に出会う。膝下へ曲がり落ちるスライダーを微動だにせず見逃した。少なくとも見ている者はそう思った。だが、無表情の裏で片岡の鼓動は速くなっていた。

「あんなキレは見たことない。正直、手が出なかった。曲がってからも強いスライダー。あの1球で相手が高校生だという考え



SPORTS NIPPON Z

を頭の中から消した」

カウント2-2。西武の捕手はベテラン中嶋聡だった。片岡は次の勝負球、ストレートでくると直感した。確信に近かった。

「あの時代のパ・リーグはお互いわかっていても力勝負。そういう空気があった」

グリップを握る力は、さらに強くなった。18mの先で放たれたボールが一瞬にして目の前で巨大化する。それをフルスイングで迎え撃つ。次の瞬間、白球はバットのはるか上を通り過ぎていた。かつてない加速度で回転した体はバランスを失い、片岡は地面に倒れた。両手が遠心力に耐え切れず、バットが放り出された。仁王立ちのルーキーとひざまずく主砲。スコアボードにはその空振りの壮絶さを裏付けるような数字が表示されていた。

片岡篤史 ATSUSHI KATAOKA

「あの1球を空振りしてから、最後までずっと手から力みが消えなかった……」

155km
東京ドームはどよめきに包まれた。

東尾修は後に語り継がれるこの1球を西武ベンチで見ている。胸に抱いていた不安がスーッと消えていくのを感じた。

「あれは今でも大輔がプロで放った一番のボールだったと思う。あれを見て『ああ、大丈夫だ』とホッとしたね」

松坂のデビュー戦をこの試合に決めたのは当時、指揮官として5年目の東尾だった。甲子園の怪物として1位で獲得した大物ルーキーは開場したばかりの西武ドームの目玉だ。当時の堤義明オーナーも、中継テレビ局の幹部も、開幕カードでの本拠地デビューを望んだ。だが、東尾は譲らなかった。「大輔は足首が硬かったから傾斜のある東



京ドームのマウンドの方がいいというのもあったし、何よりも勝ちをつけていいスタートを切ることが最優先だった」

松坂との物語が始まったのは前年のドラフト会議、東尾の右手が交渉権を引き当ててからだった。その時、松坂は横浜ベイスターズ以外の球団が交渉権を獲得した場合は社会人に進むと公言していた。だからドラフトから数日後、都内の焼肉店で極秘に本人と両親との会談をセットした。

説得のために東尾が選んだのは「ストリート」だった。特別扱いはしない。客寄せパンダにもしない。日本シリーズ第1戦に先発する投手に育てる。真つすぐに訴え、最後に、あるものを取り出した。自身の200勝ボールだった。自宅を出る前、娘の部屋にあったものを思わず手に取ったのだ。「このボールの重みを感じて欲しい。君が200勝したら返してくれ」

東尾はそう言って手渡した。まだライオンズが西鉄だった時代から15年、じつに586試合をかけて手にしたそのボールの重みを18歳に感じろというのだ。

「高校3年生の大輔は想像以上のところを目指していた。俺らの頃はそんなものわか

らなかったけど、大輔にはそれがわかる」

**2年前の8月18日、
松坂から電話がかかってきた。**

2月のキャンプ。解説者、マスコミ、ファン、あらゆる人間が松坂に殺到した。「160 km出せる」という見出しが躍る。東尾は危機感を抱き、2つの禁を設けた。スライダを投げるな。スピードガンを見るな。

「カーブを投げろっていうこと。あいつは肩甲骨が硬かったからそれを柔らかく使うために。それにスピードは打者の反応と自分の手応えで感じるもの。160 kmでも打たれるし、140 kmでも空振りも取れる。馬力だけで放っている短命なんだよ」

多くの人が松坂に夢を抱きながらもそれが本物か幻想か、まだわからなかった頃、東尾は確信していた。だからボールを渡し、理に根ざしたレールを敷いた。これは決して夢などではなく現実の道なのだ。そのために最初の一步が大切だと考えた。

「俺は箕島の田舎からいきなりプロに飛び込んでそのレベルの違いに自信をなくした。開幕は相手もエース級がくる。最初に軌道に乗ることが大事だから」

オーナーに背いてまで開幕から4戦目、敵地のデビューと決めた背景にはそういう思いがあった。だから何としても勝たせなければならぬ。そんな不安を吹き飛ばしたのが初回、155 kmのストレートだった。東尾にとってはその1球で十分だった。

空振りの後、膝をつい

た片岡は左ふくらはぎの筋肉に痛みを感じていた。冷静で選球眼に優れた打者がなぜ、体の限界を超えるほど強く振ったのか。

「プロ野球人生であんな空振りをしたことはない。とにかく、この投手は最初に叩いておかないと、という気持ちだった」

怪物の門出を真つ向勝負で迎える。そんな綺麗事ではない。脅威の芽は摘んでしまわなければやがて自分が舞台から去ることになる。片岡は計り知れないものを感じさせる若者を本気で潰しにいったのだ。主砲が感じたその危機感はインングを追うごとにベンチに充満していった。そしてノーヒットで迎えた5回、フランクリンが内角高めの速球に怒り、松坂につめ寄せると両軍がベンチを飛び出した。

「心を動揺させたり、どんなことをしてでも叩かなければという空気だった」(片岡) 百戦錬磨の男たちもなりふり構っていられなかった。だが松坂は怯むどころか真つ向から睨み返し、1歩前に進み出た。

日本ハムにようやく初ヒットが出たのは6回1アウトからだ。8回2失点。圧倒的なプロ初勝利。甲子園の怪物はそのままだ。プロでも怪物だった。夢と現実の境を忘れさせてくれる右腕に人々は熱狂した。

片岡はこの試合、4打数ノーヒットに終わった。初回の三振以降もボール球に手を出す、らしくないシーンが目立った。

「あの1球を空振りしてから、最後までずつと手から力みが消えなかった……」

松坂の巨大な才能は片岡の感覚を破壊していた。ただ、あの空振りについて今、残っているのは誇らしさだけだという。

「あの後も松坂に対しては気持ちの入り方が違った。彼も必ず逃げることなく向かってきた。あのクソボールを振らなければ記憶に残ることもなかったし、彼とそういう関係にはならなかった。誇らしいよ」

東尾はその後、松坂が3年連続最多勝に輝いた01年に退任したが、それ以降も向ける眼差しは変わっていない。

2年前の8月18日、松坂から電話があった。肩の手術を受ける病院の待合室からだった。

「今から手術します」

東尾が返したのは一言だったという。「氣いつけえよ」

励ましも、慰めも口にはしなかった。「日本に戻ってきた時にわかっていった。昔の大輔には戻れない。でもその当時は言えなかった。みんな期待していたから。あいつの頭の中も昔のイメージとのギャップが大きすぎるから、どういふスタイルがいいかと考えている。昔にはもう……」

あの頃、松坂に夢を見た人たちは今もどこかでその続きを望んでいる。ただ誰より早く、その可能性を確信していた東尾は、だからこそその日から始まった物語を最も現実的に見つめてきたのかもしれない。

今年に入り、松坂に会った東尾はこう言ったという。

「お前、200勝無理やな。俺のボール、どうするんや」

お互いに笑みを交わした。ボールの行方はまだ見えない。そもそも東尾はボールを返して欲しいと思っているのだろうか。

「実際、トロフィーなんて俺の家にはないけど、気持ちの中にあるよ。プライドだとか、自負だとか。自分の中に持っておけばいいことだから」

このボールの重みを感じてくれ——。初めて会った時に伝えた。投手の夢と現実がつまったその白球。口下手な自分に代わり、多くを語ってくれたであろう白球。今、松坂にはどれほどの重みだろうか。東尾の眼差しはその行く末をじつと見守っているようだった。

東尾修 OSAMU HIGASHIO

「このボールの重みを感じて欲しい。
君が200勝したら返してくれ」